

さん ぺい たび
三平旅ものがたり

斎藤了一・作／丸木 俊・絵



■著者紹介 斎藤 了一

1921年樺太（サハリン）に生まれる。17歳のころ、児童文学の創作を志す。1959年、処女作「荒野の魂」を発表。以後、「ぼくはおとなに」「土の花」「せんにんのひみつ」「うそつき大作戦」「とべとべホテル」「へびりが池のなぞ」「金色のかも」など多くの作品を発表。

* 現住所＝〒182 東京都調布市
調布ヶ丘 3－63－15

■画家紹介 丸木 俊

1912年北海道に生まれる。女子美術学校卒。女流画家協会会員。夫君、丸木位里氏との共同制作による「原爆の図」がある。1971年世界絵本原画展で、金のりんご賞を受賞。最近の主な作品に「あかがえるのビルとタルタル」「手ながの目」等がある。

* 現住所＝〒355 埼玉県東松山市
下唐子1401 丸木美術館

913

斎藤 了一

三平旅ものがたり

国土社 1976

72P 22×19cm（国土社の創作どうわ5）

基本カード記載例

さん べいたび

三平旅ものがたり 〈国土社の創作どうわ5〉

著者 斎藤 了一

1976年 9月10日初版印刷

1976年 9月20日初版発行

発行者 長宗泰造

印刷所 厚德社

発行所 国土社

〒112 東京都文京区目白台1丁目17-6

電話 東京943-3721／振替 東京6-90631

落丁・乱丁の本はお取りかえします。〈検印廃止〉

さん ぺい たび
三平旅ものがたり

斎藤了一・作／丸木 俊・絵



まずは 口上こうじょう

さアさア、さアさア、よつてらっしゃい、みてらっしゃい。

みるは 法樂ほうらく。きくは 極樂ごくらく。はた目めで みていりや、なんぎ

よう、くぎようも、氣きらくなもんだよ。たとえ、三さん・七しち・二十にじゅう

一日いちにち、いやいや、百日ひゃくにち、千日せんにち、へのかっぱ。人ひとのいたさは、――

――ほっときや いいかい？ ほんとかね？

さても、わたくし、花はなのお江戸えどで 名代なだいのくすりや、やげん
ばりなる 富山屋九兵衛とやまやきゅうべえ。おつとどっこい、これは だんなで



わたくし 売子^{うりこ}の、ただの三平^{さんぺい}。それは かりの名^な。まことは、
きいて びつくり、ぎつくりごしでも ぴたりと とまると、
おとに なだかい 平^{たいら}ノ朝臣^{あそん}は 三位^{さんみ}の素^すつ平^{ぺい}。心願^{しんがん}ござつて、
あの国^{くに}、この里^{さと}、へめぐりあるいて、やみ人^{びと}、けが人^{にん}、すくわ
んものと、いままた 御地^{おんち}へ さんじよう、さんじよう。

こうれ、これこれ。おしては いかんよ。前^{まえ}のおかたは お
すすみくだされ。ここまで きたなら、おとまりくだされ。お
しあい、へしあい、すすむばかりが のうではないよ。まして
や、人^{ひと}を おしのけ、つきとばし、あげくのはてには ふみつ
けにして、せせらわらうなんざア、みているだけでも きしよ
くが わるい。おなじ みるなら、しずかに しずかに――。
さても、みなさま。ごぞんじのとおり、ひとくちに やまい

ともうしましても、ずつう・ふくつう・きりきず・すりきず・
齒^はのいたみ、かぞえあげれば、四百四病^{しひやくしびよう}と もうします。やま
い それぞれならば、くすりも それぞれ 四百四藥^{しひやくしやう} なけれ
ばならぬが どうり。

だが、おたちあい。わたくし、しょうじき もうして、ただ
いま、この はこの中^{なか}に もつておりますのは、三十と八^{さんじゅうはち}
ゆ。なぜに それだけで 四百四病^{しひやくしびよう}に やくだつかと もうし
ますと、わたくし、四・九・三十六日^{さんじゅうろくにち}のあいだ、八・九・七^{はっくち}
十二^{じゅうに}しゆるいの、りようやく・ひやくをば とりまぜまして、
ずつう・ふくつう・きりきず・すりきず・齒^はのいたみ・それぞ
れの やまいを、すじみち たてて、あみいだしましたるのが、
この 三十と八^{さんじゅうはち}しゆの 妙藥^{みょうやく}。

これなれば、やけど・虫^{むし}よけ、なんでもござれ。それがし
ようこに、さる西^{さい}国^{こく}の長^{ちやう}者^{じや}さま。年^{とし}は十六^{じゅうろく}、ばんちやもで
ばなのむすめごの、虫^{むし}よけ用^{よう}にと、山^{やま}ほど おかください
ましたのも、この中^{なか}の一^{ひと}つ。

ところがなんと、このはの中^{なか}には、目^めは口^{くち}ほどに
ものをいう、思^{おも}い思^{おも}われのいい目^めぐすりまではいって
る。うそだと思^{おも}うんなら、あとで買^かって、ためしてごらん
よ。もつともようくあいてをみきわめてもちいないと、
せっかくの目^めが、うらめにでるから、ごようじんごよう
じん。

そこで、これからのわたくし^{はな}の話^{なし}、ようくおききとり
になつておくんなさいよ。

かき　みのる里さと

さあて――、これは、ある山里やまざとで、わたくしが、目にし
にしたことでございます。

はて？　あれは、いつの年としで　ありましたやら？

ただ一つひとつ、はつきりと　おぼえておりますことは、ここ、か
しこ、えだも　たわわに　みのった　かきが、色いろづいておりま
したことでございます。それに、西日にしびが　あたるさまと　いっ
たら、まるで　花はなのお江戸えどの　まちあかり――。





一つ一つを ^{ひと}ながむれば、あるものは、白^{しろ}い光^{ひかり}を はなつて、まばゆいばかり。あかあかと かがようものは、この世^よの かりを うたっているのか。中^{なか}には こうごうしいまでの、つぶらな形^{かたち}を、夕^ゆやけ雲^{ぐも}の中^{なか}に うきたたせているのもございまして。

その ありさまは、ありがたいみ仏^{ほとけ}の、かぎりなく ひろいみころを あらわしているようで、わたくし、いつとはしらず、西方^{さいほう}に むかつて りよう手^てを あわせておりました。

わたくしが、その里^{さと}を おとずれますのは、一年^{いちねん}おき。そのときは、たしか、四^しく五^ごへんめになつておつたと思^{おも}います。が、このようなことに きづきましたのは、そのときが はじめで。それだけ、わたくしも 年^{とし}を とつていた、ということ

でございましょう。

その日は、里のはずれのお堂にやどり、あくる朝はやく里いりして、あきないをすることにいたしました。

むすめごころ

ありがたいことに、目をさましてみると、こはるびよりのよいおてんき。まずはほつといたしました。

身じたくをととのえ、一夜のやどのおれいにと、はじめはお堂に、つぎはおてんとうさまにむかつて、かしわで

を　うち、里さとに　むかいました。

十じゅうちよう（約一〇〇〇メートル）ほど　ゆくつと、小ちいさな　土ど橋ばしが　か
かつております。このまえ　その里さとに　まいりますおりは、たしか、
丸まる木き橋ばしでございましたから、わたくし　思おもわず（ほ、ほう……）
と、つぶやきました。それだけ、その里さとが　ひらけた　という
わけで、あきないも　しやすいに　ちがいありません。ひとさ
まが　ごらんになっておられたら、わたくしの顔かおは、さぞかし
ほくそえんでいたこととでございましょう。その顔かおを　まだ　あ
らっていないことに　きづいた　わたくしは、土ど橋ばしの　てまえ
で　かわらに　おり、口くちを　すすいでおりました。
すると、すこし　川かわ上かみの　やぶの中なかから、なにやら　人ひとごえ
が　きこえてまいります。

耳^{みみ}を そばだてて ききいますと、ふたりのむすめは、どうやら、わたくしが これから まいろうとする 里^{さと}の者^{もの}らしゆうございます。

むすめたちは、里人^{さとびと}の 目^めと 耳^{みみ}とを さけるため、わざわざ、いばらや ささやぶを わけいり、すすぎを しているの
でございましょう。

はなやいだ、むすめむすめした声^{こえ}に、なおも 耳^{みみ}を かたむけてみますと、それは、里^{さと}の 若者^{わかもの}たちの うわさ話^{はなし}のよう
でございます。

「……それじゃ、春^{はる}サは、文十^{もんじゅう}サが すきなんだろ？」

「……さあ、そうなのか、そうでないのか、わしにも、はつきり
わかんねえよ。秋^{あき}サ」



「ふーん。そう。じゃあ、文十サだけが、春サに むちゆうつてわけなんだな」

「秋サよう。それが……。だつてさ……。わし、文十サの声きいただけで、むねが ドツキラ ドツキラしてしまつて、なにも わかんなくなつちまうだよ」

「そんなこつたら、おらだつて おなじだ。春サ。そりやあな なたつて、文十サは、里いちばんの 男つぷりだし、おまけに、油屋ときたら、ここらあたりでは、ゆびおりの 長者さまだもんなあ」

「あーレ、まア！ そんなこと いうとこみると、秋サも、文十サを すきなんじゃないの？」

こんな話というものは、いくつになつても、耳をとられて